

荒垣秀雄天声人語賞 高校生の部／中学生・高校生の部 入選

岐阜県立飛騨神岡高等学校 一年 中島 咲音

私の誕生した日に植えられ、同じ年月を生きている松の木がある。祖父が私のために植えてくれた親近感のある松だ。畑仕事を中心の祖父は、今日も私の松を見て元気でいてくれるはずだ。祖父とは、小学校へ上がるまで一緒に住んで居た。その後遊びに行くと私を畑へ連れて行って「この松の木はなあ。咲音が生まれた時に植えたんだよ。でっかくなっただろう。」と毎回毎回力説をする。余程思い入れが強いのだろうと、その度感じていた。

植えた木が、なぜ松なのか気になったので「おじいちゃん、桜や桃でなくて、どうして松だったの。」と尋ねたことがある。そうしたら、「大した意味は、ないんじゃないよ。」と、目元に皺を寄せて苦笑いして言った。私は、祖父なりの意義や思いがあつてのことと察して「そうなんや。」とうなずいた。そのさり気ない優しい語り口に、松の苗木を買って植えている嬉しそうな情景が浮かび、一時幸せを感じた。その時、「たかが松されど松」ちよつと物の見方を変えれば新しい景色が見えてくることを祖父から教えてもらった。

「咲音。これからの人生の壁や悩みには、風雪や寒さに耐えて常緑を保つ松のように何事も乗り越えてゆくように。ストレスは松風で治すように。逞しく生きていけよ。」と。言葉にはしなかつた祖父の真意に、気付くことができたように思う。日々生きている中でちよつとした気付きで、人は前向きになるきつかけを掴むことができることも知った。

だから、今の自分にできることを精一杯やって祖父と松に恩返しをしたい。今現在挑戦しているのは、「短歌甲子園」と十月にある「英語のスピーチコンテスト」。どちらも全力で作し練習に励んでいるところだ。

祖父の植えた松を通して、祖父の孫への真意と松のことを知り元氣をもらった。祖父は松ともいえる心強い存在だ。祖父の植えてくれた松は、「私の宝物」である。早速、祖父に全国大会に出場できた報告をしに行こう。